

小学生の「書く力」の実態と課題
—新学習指導要領国語科の観点を踏まえて—

An Analysis of Pupils' Abilities for 'Writing Activity'
-from the Viewpoint of New Course of Study-

中西 一彦*

Kazuhiko NAKANISHI

抄 録

本研究は、小学校を卒業する直前にある小学校6年生の子どもの「書く力」がどの水準にあるのか、また、どのような問題点が存在するのかという点について、中学校入学試験 - 課題作文を手がかりに分析し、考察を加えた。

この結果、書く手順の定着は見られるが、他者を意識した説得の表現に不十分さのあることが見出された。この事実は、12歳の年齢にある子どもは、書くことを通して、未だ、自己を客観的に捉えられるまでには至っていないことが明らかになった。

1. はじめに

多様な情報が飛び交う今日の高度情報通信社会にあっても、書く力は、知的生産活動の基礎となり核となる人間的な能力の一つである。書く活動を通して、個人の能力は創造的かつ最大限に発揮され、書き手の自己の確立へと向かうのである。その意味で、「書く」活動は、単に文字を書き留めることを指すのではない。一文字一文字に自己を刻み込むという「書く」活動こそが、今日の時代に要請される力である。書く活動は、新学習指導要領の精神にもある通り、まさに「生きる力」(Zest for Living) を実感させる人間としての本源的な活動と言っても良いであろう。

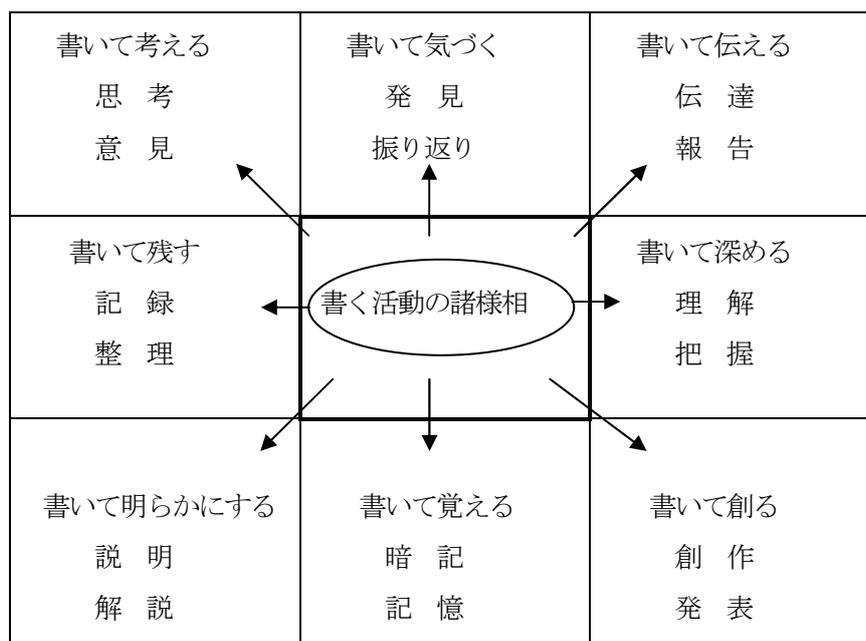
新学習指導要領は、小学校・中学校については2008年3月28日に公示され、高等学校については2008年12月23日に改訂案等が公表された。中央教育審議会の答申(2008年1月17日) - 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」 - には、小学校、中学校、高等学校の学校段階・学年段階における目標が次のように示されている。

「小学校においては日常生活に必要な国語の能力の基礎を、中学校においては社会生活に必要な国語の能力の基礎を、高等学校においては社会人として必要な国語の能力の基礎をそれぞれ確実に育成するようにする。」

*大阪教育大学附属天王寺中学校副校長

小学校の場合、キーワードは「日常生活に必要な国語の能力」となる。これをさらに、具体的事項について見ると、低学年では、「記録」、「説明」、「紹介」、「報告」であり、中学年では、「記録・整理」、「説明や報告」、「資料を提示しながらの発表」、高学年では「目的」、「自分の立場」、「解説や意見」、「報告」、「理由や根拠」、「説明」、「自らの言語活動を振り返る」となる。¹⁾

上記のキーワードをもとに、日常生活における“書く活動の様相”を筆者なりにまとめると、次のような表Iになる。



(表I)

しかも、小学校6年間において、書く活動は、螺旋状に位置づけられ、繰り返し指導（スパイラル）し、「書く力」を育成することとなっている。

本論文は、小学校を卒業する直前にある小学校6年生の子どもの「書く力」がどの水準にあるのか、また、どのような問題点が存在するのかという点について、中学校入学試験 - 課題作文を手がかりに分析し、考察を加える。

2. 研究の方法

大阪教育大学附属天王寺中学校入試における受験生の解答（作文）を対象に、この期の子どもの「書く力」の特徴を考察する。

問題内容：あなたのお気に入りの本を一冊あげ、年上の人に読んでもらえるようにすすめる文章を書きなさい。

作文を書く際の条件：

- ・マス目は原稿用紙と同じ使い方をすること。

- ・文字はていねいに書くこと。
- ・題名は書かなくてよい。
- ・13行以上, 20行以内で書くこと。
- ・3段落で書くこと。

用 紙：1行10字×20行, 縦書きのマス目を付した解答用紙

所要時間：国語の問題は全体で4問。作文は, このうちの1題をしめる。解答時間は全体で30分であるが, 受験生が作文に費やした時間は概ね10～15分程度と推定される。

被 験 者：小学校6年生 (520名)

実 施 日：平成20年1月19日

3. 研究の内容

(1) パターンへの類別からの考察

果たして, 受験生はこの設問自体の情報をどのように読み取ったのであろうか。これを, 「お気に入りの本」が記されているかどうか, 「年上の人」を意識しているかどうか, 「読んでもらえるようにすすめる」理由が記されているかどうかの観点で類別した。理論的には次のA～Gの7パターンが考えられるが, その結果は下の表Ⅱの通りである。なお, 以下, 附属天王寺中学校へ進学した113名の作文に限定する。この理由は, 中学入学後に意識調査も含めて追跡比較調査を行ったことによる。

A	お気に入りの本を一冊あげる。(読み手に)すすめる。	16名(14.1%)
B	年上の人にすすめる。	0名(0.0%)
C	読んでもらえるようにすすめる。	0名(0.0%)
D	お気に入りの本を一冊あげ, 年上の人にすすめる。	0名(0.0%)
E	お気に入りの本を一冊あげ, 読んでもらえるようにすすめる。	83名(73.5%)
F	年上の人に読んでもらえるようにすすめる。	0名(0.0%)
G	お気に入りの本を一冊あげ, 年上の人に読んでもらえるようにすすめる。	14名(12.4%)

(表Ⅱ)

① 「お気に入りの本を一冊あげる」という情報ははずす者はいなかった(B, C, F)。

Aの作文は, 単に, 本を一冊あげ, お気に入りの理由だけが記されていた(作文例1参照)。

② 「年上の人に」という情報については, Gの事例14名(12.4%)だけであり, 「年上の人」を意識している者は, 「読んでもらえるようにすすめる」理由も記していた。(以下の例2例3)。

③ 「読んでもらえるようにすすめる」の情報については, 具体的にすすめる理由を記した事例はEの83名のうちの57名(以下の例4)とGの14名(以下の例2例3)とをあわせての71名(62.8%)であった。これに対し, 単に, 「ぜひ読んでみて下さい」と文末に付しただけの事例

はEの83名のうちの26名(23.0%)であった(以下の例5)。

作文例1

私は「西のま女が死んだ」という本が好きだ。この本は六年生のとき、教科書に一部分がのって興味があったので母に買ってきてもらった。

最後にはおばあちゃんが死んでしまう物語なのですごく泣けた。しかし、主人公のまいがま女になるしゅぎょうを一所けんめいしている姿が好きだ。

それに、私はこの本を読むと悲しい話ばかりだけど、なぜか勇気がわいてきて元気になれる。そういうところが好きだ。

作文例2

ぼくは、心があたたまるお話という本をすすめようと思います。

なぜなら年上の、おじいさんや、おばあさんは、さみしがりやだからです。ぼくのおばあさんは介護してもらって老人ホームにいらしています。なのでぼくや家族の人とはなかなかあうことができないです。

だからぼくは年上の人に心があたたまるお話という本をおすすめしたいと思います。

作文例3

私は、「お父さんは太陽になった」という本をおすすめします。

すすめる理由は、家族のつながりの大切さを知ってもらいたいからです。この本を読まれると、病気に立ち向かう姿が、印象に残るかと思います。

もし、読む機会があれば読んでみてください。家族のぬくもりを今以上に感じるかと私は思います。そして、たくさんの人に命の大切さを感じてもらいたいです。

作文例4

私のお気に入りの本ははやみねかおるさんが書かれた本です。

はやみねさんの本は推理小説や冒けん物語が多いです。はやみねさんの本の中でも一番好きな本は『かいとうピエロ』という本です。『かいとうピエロ』は、みんなが盗んでくれたらいいなあというものを盗んでしまうすごいかいとうです。どうやって盗もうか考えているシーンがとてもおもしろいです。

読んでいて、心があたたかくなるので、ぜひ読んでみてください。

作文例5

ぼくのお気に入りの本は、「風林火山」です。武田信玄に仕えた山本勘助の生がいをえがいた本です。

戦国の乱世を生き抜くために、愛し、戦い、そして死んでいった山本勘助を見て、ぼくはたくさんを学び、いくつかは実行することができました。そして、大きく成長した気がしました。

ぜひこの本を読んでみてください。

(2) 文章を書く過程からの考察

以下、文章を書く過程の思考空間に着目し、子どもの書く力の実態を考察する。ここでは、秋田喜代美²⁾の「書く過程のモデル」を参考にする。秋田は、「問題を決めて解決する過程で何が起きるか」について、図Iのようにモデル化し、次のように述べている。

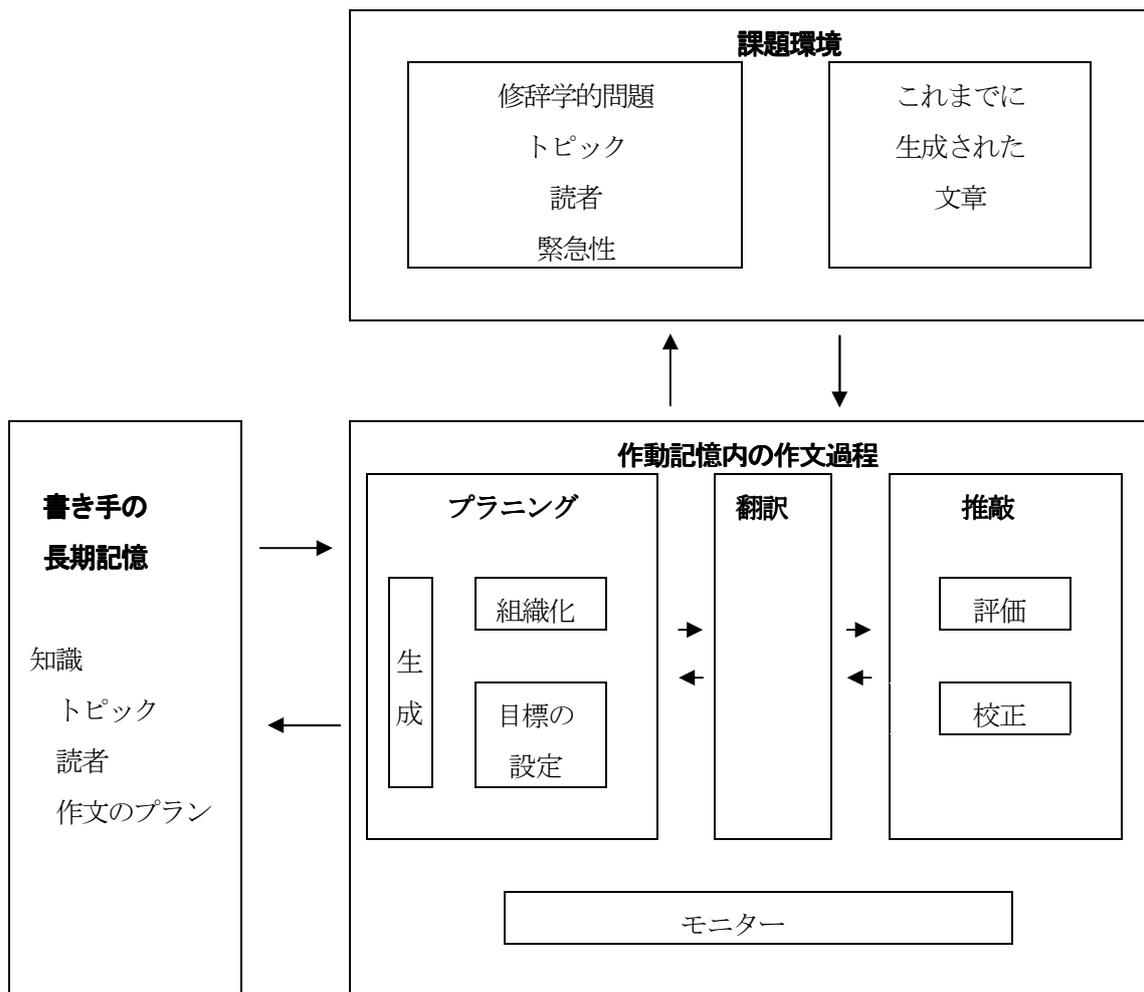


図 I

“図は大きく3つの箱に分かれています。上の「課題環境」という箱は外から与えられた課題や制約条件をさしています。何の話題（トピック）か、その文を読む読者はだれか、また時間的にどれぐらいの余裕があるのかといった書くために与えられる時間のゆとりという問題による制約が左側の「修辞学の問題」と書かれた箱で表されています。また右側の箱で表している「これまでに生成された文章」と書かれた制約は、文章を書き始める前はすべて自由でも、書き始めるとその直前までに書いた文章と意味的に続くように書くという制約が順に起こってきますから、そのことを課題として表しています。

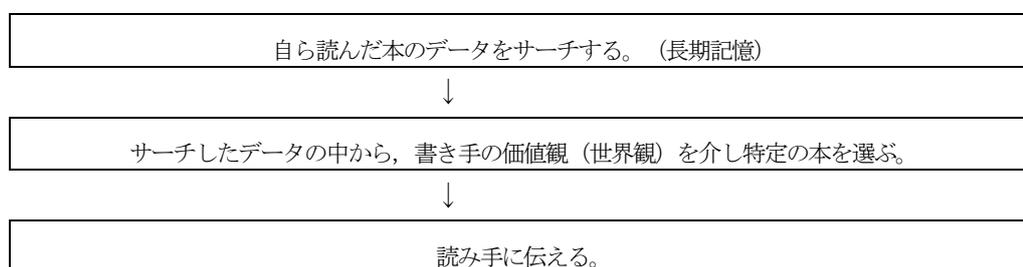
また、「書き手の長期記憶」と書かれた部分は、書き手の頭の中にある知識をさしています。たとえば書くトピックについてあらかじめ書き手が知っていること、読者について知っていること、文章を書くときの計画のたて方や書き方についての知識などいろいろな知識が書くときに利用されます。そして中央にある「作動記憶内の作文過程」と書かれた部分が実際に書くときに生じている行動です。「課題環境」として与えられる条件と「書き手の長期記憶」の中にある知識を使いながら、作文の過程として3つの過程が相互に行きつもどりつをくり返して書くことが行われます。それは「計画（プランニング）」「翻訳」「推敲」の3過程です。

まず何を書いていこうかと頭の中でモデルをつくるのが「計画」です。もちろん頭の中だけではなく、忘れないようにメモを作ることもあります。そしてその計画を実際に紙面上の言葉に書いていくのが「翻訳」です。翻訳というと外国語から日本語に直して訳すというイメージがあるかもしれませんが、ここでは1つの言語から他の言語へではなく、考えて書こうとした内容を実際に目に見える文字に表していく過程、頭の中で書こうと思ったことを書き言葉として目に見えるようにする過程を翻訳とよんでいます。そして文字として書き表された文を見ながら、書きたかったことが書けているか、適切な語や文字を用いているか、より良い表現はないかなど、知識や計画と照らして書かれた文章を見ていくのが「推敲」の過程です。

これら3つの過程の下に、「モニター」と書かれた箱があります。これは、「計画」「翻訳」「推敲」の各過程を監視し、チェック修正しようとする心のはたらきをはたらくことを示しています。”と。

上に述べた「書く過程のモデル」が小学校での実際的な授業に付される場合、「構想メモを作成する→原稿用紙に書く→書いたものを見直す」という手順で展開されるのが一般的であろう。

そうした指導を受けた子どもたちが、何をどのように考え、取り組んだのであろうか。この点について、筆者は次のように考える。



この観点から受験者の作文を考察すると次のような特徴を指摘することができる。

i) 少なくとも、計画(プランニング)→翻訳→推敲という「書く過程」を経ている。

実際、約6割の子ども(62.8%)が、お気に入りの本を一冊あげ、(読み手に)読んでもらえるように具体的おすすめ理由も記した作文(作文例2, 3, 4)に仕上げている。

入学した生徒に調査すると、

“まずどの本を紹介するのか考えた。本が決まると、その内容を思い出し、とりあえず書き始めて、いいところとかを考えながら書いた(こんな感じですよと書けばいいかなと思った)。書いたものの筋が通っているか確かめて終わった。”

ということであった。

このことから、少なくとも「書く過程のモデル」通りの手順を踏んでおり、小学校6年間で、書く手順を学習し、身につけていることが分かる。

ii) 書く主体（書き手）が、他者（読み手）へ書いたものを媒介として、自己を客体化している。

具体的おすすめ理由を他者（読み手）に書き表すことで、書き手自らが自己に言い聞かせ、納得している（作文例2, 3, 4）。単に書き留めるという「書く」のステップから、自己を客体化し、自己を刻むという「書く」のステップへと進んでいることが分かる。

iii) 論理的思考力が身についている。

事例に取り上げた作文例1～5から分かるように、まず、おすすめの作品名の紹介があり、続いて、なぜお気に入りなのかの理由が述べられるという文章構成が多数を占めた。つまり、結論をまず記し、その理由を述べていく構成となっている。従って、個々の事実を鎖でつなぐ論理はしっかりとしており、極めて高い論理的な思考力が認められる。

しかしながら、反面、次のような問題点も見出された。

・自己の世界観と他者（読み手）の世界観との間に明瞭な違いが在ることが認識されていない。

先の①と③に挙げたように、「お気に入りの理由」だけで文章を展開した者と、最後に「ぜひ読んでみて下さい」を付しただけの者とを合わせると、全体の約4割(37.1%)になる。

既に触れたように、“こんな感じですよと書けばいいかなと思った。”との生徒の弁があった。このことは、別様に言えば、「自己」の思いがそのままに「他者」に伝わるという思い込みの表れであるといえよう。小学校で「書く活動」を通した結果の読み手は、最終的には担任の先生である。担任の先生は、間口を広げて、できるだけ子どもに寄り添って文章を受け取ろうとする。そのまま思いが伝わるという意識は、ここに芽生えているとも言える。

また、先の②に挙げたように、「年上の人」という情報を意識した者は14名(12.4%)であった。それ以外の子どもは、日常の学校での学習経験から「年上の人」を、読み手である「試験官の先生」と定めて書きすすめたと予想される。「先生」は近い人である。ゆえに、「年上の人」という情報を特別に意識せずに書いたのではないだろうか。敬語を用いた者が、Gパターンのうちのわずか9名(8%)であったことも、ここに起因すると思われる。他者（読み手）を特定の人にしばって焦点化して書かせ、敬語使用意識の有無を確かめる試みが必要と考えられる。この点についての実証的な研究は今後委ねることとする。

4. まとめと今後の課題

今回の「書く活動」は、受験という緊張した場面であった。さらに、読み手は試験官であるという制約が課されたものであったが、受験生が全力を傾け、彼らの「書く力」をすべて如実に表出したものと考えることができる。

従って、一つの結論として、子どもの「書く力」については、次のことが示唆される。

子どもの「書く活動」においては、小学校6年間の中で、書く手順を身につけており、文章構成における型（形式）模倣による論理的思考力も認められ、単に書き留めるという「書く」ステップから自己を刻むという「書く」ステップへ着実に進んでいる。しかし、自己の世界観と他者の世界

観との間に明瞭な違いが在ることが認識されておらず、結果として、自己に引きつけて書き上げることはできるが、他者への説得の工夫、敬語使用という点では不十分であることが判明した。

新学習指導要領の「C読むこと」の言語活動例として、小学校低学年では「オ 読んだ本について、好きなところを紹介すること」、中学年では「エ 紹介したい本を取り上げて説明すること」、高学年では「エ 本を読んで推薦の文章を書くこと」とされている。高学年になると「読むこと」と「書くこと」との密接な関連が必要となることが示されているととらえることができるが、今回の研究対象となった課題作文は、文字通り、新学習指導要領の先取りであったといえる。よって、今後小学校現場で新学習指導要領が実践に移される際の課題と問題点が、本稿を参考にすることで、明らかになっていくものと思われる。特に、他者（読み手）を特定の人にしばって、焦点化し書かせるという試みと今回の課題作文との比較を行うことは、敬語という観点を踏まえて、子どもたちの「書く力」を伸ばす有効な研究・実践であり、緊急の課題であると考えられる。

引用文献及び注

- 1) 小森茂：『新学習指導要領 小学校国語科の実践指針』明治図書 2008
- 2) 秋田喜代美：『読む心・書く心 文章の心理学入門』北大路書房 2002 pp.95-97

参考文献

- 内田伸子：『子どもの文章 書くこと考えること』東京大学出版会 1990
- 益地憲一編著：『小学校国語科指導の研究』建帛社 2002
- ディル・H・シャンク バリー・J・ジーマン編著：『自己調整学習の実践』北大路書房 2007
- 文部科学省：『小学校学習指導要領 平成20年3月 告示』東山書房 2008
- 文部科学省：『高等学校学習指導要領，特別支援学校学習指導要領の改訂案等』2008・12・23 公表
- 文部科学省：『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』中央教育審議会答申 2008・1・17

Abstract

This paper has examined what kind of characteristics or tendencies pupils before graduation, the sixth graders in elementary school, have concerning 'writing activity' on the basis of the New Course of Study. As a result, while the establishment of procedure for writing could be recognized, on the other hand, the device to have them understood, concerning for others, has found out to be insufficient.